
「はね馬」と隨身

大阪大学 金子 岳史
KANEKO Takeshi

中世の絵巻物にしばしば見られる特徴的な表現の一つとして、詞書の記述に比して異様に長大な行列場面の存在が指摘されているが、そういった行列図の中には、東寺本『弘法大師行状絵詞』第十二巻のように、暴れ馬とそれを必死に制する隨身の姿が描かれるものが複数存在する。整然とした行列の中で馬が暴れている情景は非常に印象的であり、それには何らかの意味があると思われる。そこで中世史料を見ていくと、隨身が暴れ馬を操ることが、一種の馬芸として認知され、もてはやされていたことがわかる。つまりこれらの表現は、理想的な隨身の姿を描いたものと考えられるのである。

発表者は、「大宋屏風と馬形障子」(『待兼山論叢 美学篇』第40号 2006年12月刊行)において、『古今著聞集』に見られる「はね馬の障子」が、他の史料にも「斐馬障子」「零駕障子」等の表記で登場すること、「はね馬」とは単なる跳ねる馬ではなく、暴れ馬全般を意味することを指摘した。そして『高野大師行状図絵』(白鶴美術館蔵)に描写された清涼殿の画中画から、「はね馬の障子」の図様は、実は隨身が「はね馬」を操るものであったと推測した。本発表ではこの成果を踏まえ、「はね馬」と隨身という主題の広がりについて考えてみたい。「はね馬」と隨身を単独で主題にした図様は、『高野大師行状図絵』以外の絵巻中にも、画中画として散見されるのである。したがって「はね馬」と隨身の図像は、行列図の定型表現でもあったが、また同時に、中世において一般的な障屏画の主題としても流布していたのではないかと考えられる。

以上の点を踏まえると、『隨身庭騎絵巻』(大倉集古館蔵)についても、そういった系譜の中に位置づけられるのではなかろうか。従来『隨身庭騎絵巻』は、「似絵」という観点から注目され、人物の特定ならびに様式論については多くの論考があり、その成果は疑うべくもない。しかし、この作品を「似絵」という観点から一旦離れ、「はね馬」と隨身という主題の一例として捉え直してみることで、新たに見えてくることがあると考える。この作品に描かれた馬と隨身の姿態は、先に挙げたような絵巻の行列場面や画中画に同様のものが見られる。よってこの作品は、当時描き継がれた騎馬人物の図像の「型」に、特定個人の面貌を描いたものとも考えられるのである。

さらに本発表では、平安時代の「はね馬の障子」や行列図に端を発し、その後も絵巻物や障屏画に受け継がれた「はね馬」と隨身の図像が、やがて『廐図屏風』という主題の成立の一因をなす可能性についても言及したい。